

自由法曹団通信1393号 9月21日号掲載

自由法曹団とは

自由と人権、平和のために闘う2000名を超える弁護士集団

書評 毛利正道著「復興・財源は支え合いでこそ」

埼玉支部・大久保賢一

毛利さんから、「復興・財源は支え合いでこそ」(かもがわブックレット182・税込定価630円)が送られてきた。サブタイトルは、「私たちと地球、明日の人類を救え」である。併せて、書評を団通信に書いてくれとの依頼もあった。確かこのようなタイトルの団通信の記事を読んだ記憶もあるし、毛利さんの発言にはいつも注目させられているので、引き受けることとした。少し時機に遅れたかもしれないけれど、約束を果たすこととしたい。

このブックレットは、今回の大震災と原発事故から、私たちが何を学び、どのように「復興」していくかを考えようというものである。63頁ほどの中に、毛利さんの想いが整理されている。結論は、「地球人類が共生できるつながり社会」をつくらうである。もちろん、それは「日本国憲法の花開く新しい社会」を含意している。

まず、最初に感じたことは、毛利さんはよく泣く人だということである。「幻想曲さくらさくら」や「ノクターン二題ショパン」を聞いてとめどなく涙を流し、寅さんのリリーシリーズ(浅丘るり子)を見て泣き続けるのである。還暦を過ぎた男が(差別語か?)、音楽を聴き、映画(しかも寅さんだ)を見て泣くのだから、これは尋常ではない純情さであろう。

ぼくは彼のこの純情なところが好きだ。多分、このブックレットを読む団塊世代の団員は、それぞれの青春時代を思い出して、そこはかとなく共感できるであろう(もちろんそれ以外の人たちを除外するというわけではない)。

そして、この感懐は、今という時代を生きる上で、基底に置いておきたいものでもある。人間の営みに対する共感や優しい気持(これがこのブックレットの通奏低音である)が欠落してしまえば、不必要な絶望感に取り込まれてしまうからである。

だからといって、彼は徒に抒情に流されているわけではないし、根拠のない希望的意見を述べているわけでもない。地震や津波の原理や、縄文時代の共同体の在り方や、国際的災害救助の在り方についてまで視野に置いた上で、提言しているのである。そこにあるのは、資本主義的生産様式の基底にある「わが亡き後に洪水は来た

れ」という発想を唾棄し、大量生産、大量消費、大量廃棄を排除し、「孤立無援社会」からの脱却をという思想である。

彼は、「人類は、多くの未成熟の子どもを同時に育て上げるための安定した家族と、その家族が他の動物のえさになることを防ぐために100名前後の集団化によって、成立し成長してきたのです…」という。そして、「ご近所社会の再生は、ここ日本にとって、戦後65年の、ひょっとすると明治以来140年にわたる歩みのパラダイム転換になるのではないのでしょうか」としている。

彼は、人間の連帯・共同の力が、私たちの地球と明日の人類を救うことになると結論する。一人の発達が社会発展の基礎であり、社会は一人ひとりの個人の発達可能性を保障するという「未来社会」を展望しているかのようである。

ぼくには、彼が展開している縄文時代の日本社会の実情についてコメントする能力はないし、彼が主張する人類を救うための提案、例えば、儲け本位社会の基礎となっている土地私有制をなくして公有制にするとか、「車社会」を大胆に見直し軽自動車と公共交通社会にする、などについては、その賛否をとりあえず留保しておくこととするが、「火事場泥棒的」に改憲や規制緩和を押し進めようとする支配層に対する怒りには共感したい。

手軽に読めるし、考えるきっかけを提供してくれるブックレットなので、ぜひ一読をお勧めする。

2011年9月7日記